
終わりへの始まり

茉南茄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりへの始まり

【Nコード】

N9423G

【作者名】

茉南茄

【あらすじ】

悲劇は突然、始まった……。それは組織を追っていたある日のことだった。その日の前日、工藤君は雨の中をずぶ濡れになりながら帰ってきた……。これは悲劇の始まりでも終わりへの始まりでもあった。

第一話：心配

悲劇は突然、始まった……

それは、組織を追っていたある日のことだった。

その日の前日、工藤君は雨の中をずぶ濡れになりながら帰ってきた

工藤君が言うには「頭を冷やしてた」そうよ。全く……

幾ら心配を掛けさせたら気が済むのかしら……

蘭さんも大層心配していたわ。

あまりにも工藤君の帰りが遅いので蘭さんから博士宅に電話がかかってきたの

哀「はい、もしもし。阿笠ですけど、」

蘭「あ、哀ちゃん？私。蘭だけど、コナン君、そっちにお邪魔してない？」

哀「いえ。知りませんが。どうかしたんですか？」

蘭「まだ、帰ってきてないの。もう、夕方の5時よ。」

哀「じゃあ、江戸川君に何かあったらいやなので、私、今から其方へ伺ってもいいですか？」

蘭「ええ。今は、お父さんが居なくて独りなの。来てくれる？」

哀「はい。」

そして、私が事務所に行くときまだ、工藤君は帰ってきていなかった

時刻は只今、夕方の5時半過ぎ

幾ら工藤君でも遅すぎじゃないかしらと思った矢先だったわ。

私と蘭さんが待ちわびた彼が帰ってきたのは・・・

コナン「ただいま」

蘭さんは工藤君が帰ってきたのが分かった途端、玄関に飛んでいったわ。

第一話：心配（後書き）

「悲劇の始まり」を投稿した茉南茄です。

でも、続きが投稿できなかったのでもっとここに書き直しました。すみません……

茉南茄

第二話：帰宅

工藤君は玄関を少し入ったところで立っていたわ。

蘭さん「コナンくん、ずいぶん遅かったね……。何かあったの？？」

蘭さん「……………それと、ずぶ濡れじゃない!!!大丈夫??」

哀ちゃん、ごめん。お風呂場から

タオル、持ってきてくれる??」

哀「はい!!」

それから、私がタオルを持ってくるまで、工藤君は何も喋らなかつた……………

哀「蘭さん、これ。」

蘭さん「哀ちゃん、ありがとう。」

蘭さんは工藤君にタオルを被せようとした

でも工藤君は、タオルを被せきる前に玄関に崩れ落ちてしまった

の・・・

たぶん、蘭さんが「コナンくん、大丈夫??」と言ったら、その声に呼応するように

蘭さんの方へ一歩、二歩、歩き出したかと思うと、体がずっしりと重たくて思うように足がうまく

動かなくて、そのまま床に崩れ落ちてしまったんだと思うわ。

蘭さんは驚きの声をあげてすぐに駆け寄り、工藤君を抱き上げたわ。

工藤君にもはや、意識は無かったわ・・・

そして、工藤君の体は信じられないほど熱かった・・・

てしまったの……。

蘭さんは、電話を置くと、「もう、なんなの!!!!!!」とすく、怒っていた。

哀「蘭さん、米花中央病院は、診察してくれるみたいですよ。」

蘭「哀ちゃん、電話してくれてたの??ありがとう。……でも、病院まで、どうやって行くの???

「コナンくん、抱いて歩いていくのもなんだし……。」

9

哀「……あ……!!!!」

哀「博士に電話すればいいんじゃない???

蘭「あ……ホントだ。なんか、今日は哀ちゃんにいっぱい助けられちゃってるね(笑)」

哀「//////////」

私が赤くなってるうちに、蘭さんは博士への『至急ヘルプ』の電
話を終えたようだった。

第二話・帰宅（後書き）

ども。茉南茄です^^読んで下さってありがとうございます^^
今後ともよろしく願いします^^

茉南茄

第三話：病院

阿笠博士はすぐに車で来てくれて病院まで連れて行ってくれた。

蘭さんは工藤君を抱いて後部座席に、私は助手席に座った。

博士「コナン君の熱は、どれくらいなのかのう。」

蘭「・・・・・・41度4分・・・あるんです。」

博士「なっ・・・なんじゃとー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

哀「博士、ちゃんと前見て！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

博士「あ・・・哀くん、すまんのう。」

博士が熱の高さにびっくりして、絶句してしまった・・・
そのころ、蘭は蘭で、コナンが心配なあまり会話をほったらかし
にっして

コナンが咳き込むと背中をさすったりしていた・・・

～病院～

病院に着くと蘭はすぐに受付に走った

蘭「すみません、さきほどお電話をさせていただいた毛利ですけど……。」

安藤亜耶「受付」「少々、お待ちください。」

亜耶「毛利さん……江戸川コナン様ですね。」

蘭「そうです。」

亜耶「この廊下をまっすぐ行っていただくと、第6診察室がすぐあります。そこに、町村先生がお待ちです。」

蘭「ありがとうございます……！」

博士と哀はここで蘭に追いついた。なんせ、駐車場から受付のある入り口までが遠い場所しか車を置けなかったため、

蘭が全力で走っていったので普段、運動不足の博士とそれに付き合っていた哀が追いつくのに時間がかかってしまったのである。

〈第6診察室〉

蘭「先生、コナン君は大丈夫でしょうか?????」

町村「雨に強く、そして長時間濡れたため、肺炎の可能性も考えてはいましたが、その可能性はおそらくないでしょう。」

蘭「・・・よかったあ〜」

町村「しかし、普通の風邪にしては熱が高いので、万が

「、何かあった・・・では、まずいので入院していただいてもよろしいですかね?????」

蘭「はい。」

蘭「すぐに、着替えを持ってきます。」

↳コナンの病室↳

蘭「コナン君↳、着替え持って来たよ。」

コナンは規則正しい呼吸で眠っていた。

て
い
っ
た。
。

蘭は安心したのか、また明日くるね〜と言いき、帰っ

第三話：病院（後書き）

たった今、期末テスト中です・・・

勉強しろよって話なんですけど、勉強の仕方がわからへん・・・

高1にもなってこんなことゆうてたらだめですよね・・・。は

ああー

小説と関係ない話ですみません・・・

あと、更新もめっちゃ遅い・・・

ごめんなさいm(_____)m

茉南茄

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9423g/>

終わりへの始まり

2011年1月27日02時23分発行